

広島別院だより

Vol.36
春号

真宗大谷派（東本願寺）
広島別院教化委員会 発行

春彼岸会勤まる

三月二十二日、春彼岸会が勤まりました。講師は福山市明圓寺（備後組）松江長親師です。以下、法話の抄録です。

●ぶれない確かな教え

三重県に真宗高田派の本山専修寺がある。そこで開催される聞法会に何度か参加したことがある。その聞法会は大谷派や本願寺派をはじめ真宗各派の僧侶や、僧侶以外の方々もたくさん参加される。そこである在家の方と出会った。私とあまり年齢の変わらないその方は、家族と二時間以上かけて専修寺にいられたそうだ。

聞法会の夜、その方に聞法の動機を訪ねると、その方は少し考えた後、「ここはぶれないのです」と答えられた。「ぶれない」というのは真宗の教えが普遍的で確かなものであり、自分の拠り所になっているということであろう。逆に言えば、この方は日常生活で自分の考えがいかにぶれているかを聞法によって知らされた人なのである。

●ぶれる不確かな私

以前、お寺の掲示板上にかけた法語である。

見えるものは私が見たいもの

見えないものは私が見たくもないもの

見えないものこそ見るべきもの

私たちは自分の目でものを見て、正確に物事を

判断しているつもりだが、その目は自分の都合でしか見ることができない目なのである。その曇った不確かな目で価値を判断する私たちの人生は常にぶれているのである。「ぶれている」というのは仏から言い当てられた、まぎれもない私の姿なのである。

●お寺は自分自身を学ぶ家

親鸞聖人の和讃に

七宝講堂道場樹

方便化身の浄土なり

十方来生きわもなし

講堂道場礼すべし



松江長親 師

とある。「講堂」とは聞法の道場、つまりお寺である。親鸞聖人は「講堂」の字の横に小さく「ならういゑ」と書かれている。お寺はならう＝学ぶ家である。では何を学ぶのか。それは自分自身とは何かを学ぶ家なのである。学び、そして見えてくるのは、ぶれる不確かな自己なのである。では、聞法は、ぶれない確かな自分になっていくためにするのか。そうではない。

煩惱を無くすことが煩惱

だとしたら君はどうする

毎田周一氏の言葉である。ぶれない自分になるうとして、さらに自分自身を縛り上げていく。これもまた煩惱なのである。

では、私たちは何のために聞法するのか。

●安心してぶれる

専修寺で出会ったその方は「ぶれてもいいのではないか」と言われた。ぶれない自分になろうとして自分を縛る必要などない。どこまでも迷い続ける自分がいるからこそ、教えを聞く道場があるのだ。そして確かな拠り所があるからこそ、日常生活を安心してぶれることが出来るのである。

お寺とは、私たちが安心してぶれ、安心して帰ることのできる聞法の道場なのである。

真宗の仏事入門講座開催

四月二十二日、広島別院で真宗の仏事入門講座が開催されました。

第一回講座は「真宗の儀式と莊嚴」というテーマで本山本願部長の近松誉（ちかまつただし）先生が講師をつとめられました。お内仏のお給仕や法事などの儀式はなぜ行うのか、その根拠についてお聖教にふれながらの講義でした。コロナ禍にも関わらず多数の参加があり、仏事に対する関心の高さがうかがわれました。

次回は六月二十三日

日に「本堂とお内仏の莊嚴」というテーマで開催されます。

ぜひご参加ください。



近松誉 師

親鸞聖人の生涯を辿る

比叡山

九歳で得度した親鸞ですが、謎の多い親鸞の生涯の中でも一番分かっていないのが、この比叡山における二十年間です。唯一残っている資料は後の妻惠信尼が娘の覚信尼に送った手紙に、比叡山で堂僧を勤めていた、という記述があるのみです。栄達を目指す学生やその従者がなる堂衆ではなく、念仏三昧行などを行う堂僧だったということ、その後の逸話や残っている著作から、厳しい修行や相当な経典の学習に励んでいたことがうかがえます。

親鸞は二十九歳で比叡山を降りることとなりますが、なぜでしょう。一つには強烈な挫折があったからでしょう。比叡山の修業は自らが悟りを開くためでした。しかし様々な煩惱はどれだけ修行しても、懸命に学んでも、消えることはなかった。青年期の多感な感情を制御することもできない、如何ともしがたい自分が見えてきたのだと思われまます。

もう一つは伝説ですが、親鸞は十九歳の時に夢告を受けたそうです。磯長の夢告として伝えられるそれによると、親鸞の命はあと十数年だと告げられたそうです。それだけでなく、比叡山での修行が行き詰まる中で、親鸞は焦燥感にかられたと思われまます。そして道を求めて入った比叡山を降り、すぐる思いで六角堂へ行くことになるのでした。

法座・講座等のお知らせ

6月23日(木) 真宗の仏事入門講座



【講師】 近松 誉 先生 (東本願寺本願部部長)
【日程】 毎回 13:30~16:00 【会費】 500円
(浄土真宗の仏事について学ぶ講座です。ぜひご参加ください。)
【今後の日程】 7月25日(月)

7月6日(水) 非核非戦法会兼原爆死没者追弔会



【講師】 宍戸 大観 先生 (広島市安芸区龍善寺住職)
【日程】 14:00~勤行と法話 16:30 終了予定
<非核非戦法会兼原爆死没者追弔会をお勤めします。仏教の視点から戦争の問題について語られます。お誘い合わせのうえご参詣ください。>

注)法要期日が緊急事態宣言下になりましたら、内勤めといたします。参詣はご遠慮ください。

毎月5日 定例法話 (ご今日の集い)

【講師】 県内僧侶(月替わり) 【日程】 14:00~勤行と法話(15:00 終了予定)
(広島別院開基 教如上人の御命日(毎月5日)に法話会があります。)

講座・法要・定例法話にお参りの際は、マスク等してコロナウイルス感染拡大防止にご協力ください。

道場樹

【編集室より】

〜帰ってきた憎まれ口〜

昨年春、神戸の友人がコロナウイルスに感染した。しばらく音信不通だったが、連絡が届いたのは感染から数か月後の初夏だった。もともと三半規管に難のある彼は回復後も後遺症によるめまいと吐き気に悩まされていたようである。

彼とは学生時代からの付き合いで、どちらかと言うと斜に構えて、ああ言えばこう言う強気のタイプであり、昔から何度もぶつかったきた間柄である。その彼から憎まれ口が消え、珍しく弱音を吐く姿に、後遺症の厳しさがうかがえる。

彼の感染から一年が経った。後遺症も昨年に比べ少し軽くなったようである。先日電話で近況を聞いた際、彼の口から「神戸ほど都会ではない広島でも感染者は減らんような。まあ、お前もいずれ感染するやろ。経験者として感染者の心得を教示してやる。その時は連絡をよこせ」と。

いつもの口調に少マイラっとしたが、帰ってきた憎まれ口が嬉しいのである。

(H・N)

